

◎ フランス語について

世界を理解し、異なる他者や異文化との共生を図るには、英語だけでは不十分で、複数の言語能力を身につける必要があります。ヨーロッパでは、1990年代から複言語主義を訴え、ヨーロッパ市民に対して母語に加えて二言語の習得を求めています。文化の多様性を維持発展させ、より民主的なヨーロッパを形成するには、複言語能力が欠かせないのです。国際社会を一瞥しても、言語教育を英語に集中する国は異例で、隣国の韓国でも第二外国語は高校からの選択必修科目です。

フランス語は、フランスをはじめとして世界の五大陸の国や地域で、国語や公用語などさまざまな資格で使用され、国連で代表が発言をフランス語で行う国は191加盟国のうち約40といわれています。フランス語を母語とする人口は1億3千万人（このうちフランスの人口は5800万人）で、第二言語として日常生活に利用している人口を加えても二億人ほどで、決して言語人口は多くありませんが、世界各地にいろいろな経緯から散在しています。フランス語は国連や欧州連合(EU)の公用語や作業語であるだけでなく、オリンピックや国際サッカー連盟(FIFA)といったスポーツの公用語でもあり、さらにアフリカのフランス語圏諸国に対する国際協力や、ヨーロッパとのビジネスの分野でも必要とされています。フランス語はこのような実務的領域だけではなく、人文科学や、政治、経済などの社会科学、あるいは自然科学の学修・研究にも重要な役割を果たします。人文社会科学の領域では哲学のデカルト、法学のモンテスキュー、人類学のレヴィ=ストロース、文学者のヴァレリー、自然科学の領域では化学のゲ=リュサック、生理学のパスツール、物理学のド・ブロイ、数学のガロワ、生化学のモノーなど、フランスの世界文化への貢献にはきわめて大きなものがあります。

また、歴史をひもとくと、日本は近代国家の構築にあたりフランスからフランス語を媒体として西洋文明を受容し、これはとりわけ政治、法律、軍事、産業の分野などで重要な役割を果たしてきたことが知られています。京都大学でのフランス語学習はまず、専門課程での外書講読などへ向けた基礎教育の役割を担っています。しかし、2年次以降にさまざまな領域のフランス語原典に接するとしても、これは高校までの英文和訳とは異なるもので、学術的知を批判的に受容し、読解を通じて、原著者との知的対話をめざすもので、知的コミュニケーションの一つに類型化されるものです。

コミュニケーションは書物の世界に限定されません。本学のフランス語教育は、入門段階から日本人教師とフランス人教師とが分担して教育に従事しており、実践的コミュニケーション能力の養成にも配慮しています。京都大学では、フランスをはじめとして、数多くのフランス語圏の大学と交流協定を締結しており、留学をサポートするさまざまな種類の奨学金もあります

ので、フランス語学習を通じて、フランス語による学習に挑戦し、異文化体験を深めてみることを勧めます。